

競技者の他者志向的達成動機に影響を与える 応援と応援者の特性

○岡島由佳・石野陽子

(島根大学教育学部学校教育課程 I 類・島根大学教育学部)

目 的

心理学では、スポーツ競技に対する動機づけとパフォーマンス向上との関係が検討されている（例えば、伊藤（2015））。伊藤(2015)は、他者志向的達成動機について「他者からの支援に対する恩返しや期待に応えるという意識によって支えられた動機づけ」と定義しており、応援に対する反応が、他者志向的達成動機への態度により異なるとしている。そこで、実験 I では、大原ら(2020)をもとに、応援の有無による反復横跳びの回数を比較する。実験 II では、伊藤(2015)をもとに、自己・他者志向的達成動機の高さと応援の有無で反復横跳びの回数を比較し、検討する。

本研究では、他者志向的達成動機が低い人、負担感を感じる人などに焦点を当て、試合中の状況の違いにおける競技者の他者志向的達成動機に影響を与える応援の特性について検討する。

実験 I

【方法】

実験対象者：島根大学男子バレーボール部に所属する男子部員 10 名。**実験時期**：2024 年 8 月―9 月の木曜練習日。**実験方法**：実験対象者に応援の有無で反復横跳びをしてもらう。実験対象者を 2 つのグループに分け、ペアになり反復横跳びの回数の計測をしてもらう。20 秒反復横跳びをした後に 1 分休憩し、交代する。

【結果と考察】 実験結果は表 1 の通りであった。

表 1 応援の有無による反復横跳びの回数

	1 回目	2 回目	3 回目	4 回目	5 回目
応援あり	65.20	66.80	69.40	67.50	65.70
応援なし	68.10	65.50	65.80	66.20	66.60

応援ありは、中盤にかけて回数が上がっていったが、終盤で回数が落ちた。応援なしは、1 回目が 1 番回数が多いのに比べて 2―5 回目は回数が少なく変化があまりみられなくなった。このことから、応援効果はあるが最後まで持続しないのかもしれないと考えられる。

実験 II

【方法】

実験対象者：島根大学男子バレーボール部に所属する男子部員 9 名。**実験時期**：2024 年 10 月 31 日、11 月 4 日。**実験方法**：実験対象者は応援無しの状態です。反復横跳びをする。実験対象者は 3 人一組になり、被験者・測定者・応援者とする。1 人ずつ 20 秒反復横跳び 1 分休憩を 5 セット繰り返し、交代する。応援無しで反復横跳びを行った後、伊藤(2015)の「自己・他者志向的達成動機への態度尺度」の自己志向的達成動機、他者志向的達成動機の 7 項目を用いて 4 件法で回答を求める。別日に応援ありで応援なしと同様の方法で計測する。

【結果と考察】 実験結果は表 2 の通りであった。

表 2 自己・他者志向的達成動機の高さと応援の有無による反復横跳びの回数

	応援あり	応援なし
自己中・他者高群	65.15	63.95
自己高・他者低群	65.40	67.00
自己中・他者中群	64.13	60.73
自己低・他者高群	58.20	59.00

自己中・他者高群は、応援ありの方が反復横跳びの回数が多かった。自己高・他者低群は、応援ありの方が反復横跳びの回数が少なかった。自己中・他者中群は、応援ありの方が反復横跳びの回数が多かった。自己中・他者高群、応援ありの方が反復横跳びの回数が少なかった。自己志向的達成動機が高い人ほど応援に効果があったが、他者志向的達成動機の高さに関係がなかった。このことから、他者志向的達成動機が平均より高い方が応援効果はあるが、自己志向的達成動機が低いことで応援効果がみられなくなるかもしれないと考えられる。

今後の計画

競技者の自己・他者志向的達成動機の質の違いによって、試合中のどのような時期にどのような応援をすると効果がみられるのかを調査する。